

我を見つめて

奨励	若林 裕〔わかばやし・ひろし〕
奨励者紹介	同志社大学神学部嘱託講師 同志社女子大学嘱託講師 桃山栄光教会牧師

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」

（マタイによる福音書 7章1—5節）

今日は暦に大暑とありました。まさに夏本番となり、本格的な暑さがこれからまた続くのですね。学生の方々には、いよいよ期末試験シーズンですが、暑さに負けないで一歩一歩地道に歩んでください。

自己中心的な人間

さて、読んでいただきました聖書の箇所、「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」という御言葉がありました。如何でしょうか。

ふっと自分たちを振り返り考えさせられます。私たちは、どこか自分を忘れて、人の欠点ばかりが目についてしまわないか。自分を棚に上げて、人の問題点ばかりを指摘し、自分の足りなさ、至らなさについては気づこうとしないところがあるではないか。そんな風に思わされるのです。一方、その裏返しで、自分自身に劣等感をもってしまう。人がうらやましくなる。それだけで話が済めばまだよいのですが、なかには、その妬みや嫉妬から、その相手に対し何か悪い噂を作り上げて、周りに広め、その人を陥れようとするようなところまでいってしまう。相手を意図的に傷つける。足を引っ張る。そんなことさえ起こります。悲しいですね・・・。

でも、どうでしょう。ただただ、他人の間諍いや失態を非難することだけを繰り返し、自分があたかも相手を打ち負かしたつもりになり、勝ち誇って、勝利者になったように思えても、それは相手を傷つけるだけであり、そこで本当に自分自身の平安は得られるでしょうか。結果的には、お互いがお互いを否定してしまうことだけになるのではないのでしょうか。そこにあるのは分裂なのです。もっとも、こうした小さな人間同士の傷つけあう行為が、日常生活のなかで、ときに学校でも、あるいは家庭内でも、友達同士の間においても繰り返されている。「自己中心的な人間」、これが私たちの、またある意味では、今の時代の一つの姿なのかもしれません。残念ですが、そう思えるのです。

主の眼差し

そんな私たちにイエス・キリストは言われるのです。「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。（中略）あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。（中略）まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきりと見えるようになって（後略）」と。

御言葉を通してこのことを指摘された主イエス・キリストは、最後に十字架に付けられた時には、そんな「いじましい人間」のために、こう祈られました。「この人たちは自分が何をしているのか、分らないのですから、許してください」と。主イエスは、自分たちを救おうとする神の子さえも、悪者に仕立て上げ、謀って十字架にかけて殺してしまう、そんな人間の、どこまでも身勝手な思い込み・浅ましさ・恐ろしさ・そして悲しさのすべてを見抜いておられたのです。そのすべてを知りながら、なお最後まで神さまに執り成されたのです。

このイエスの御心・主の眼差しは、人間の抱えるそのおぞましいまでの現実を見据え、そしてそれ以上に、エゴイズムに陥ってしまう人間の痛ましいあり様そのものへと絶えず向けられていました。だからこそ、主イエス・キリストは憐れみをもって、人間の悪意を善意へと変えるべく、欠点だらけで、不完全で問題のあるものを、限りなく優しく包まれたのです。そして、そのような人間を救い、その人間のあり様を救うべく、イエス・キリストはどこまでも待ってくださっている。やがてその人間が変わってゆき、大きく前進していくようにと祈りつつ、ゆっくりゆっくりと待ってくださっているのです。

それに気づく時、主は働きかけられます。語りかけられます。人間の心の扉を叩き続けられる。それは決して相手をおとしめ、潰し、劣等感を与えるためではありません。それは不完全な私たちを救い、生かすためなのです。そのために主イエスは、自らが十字架の痛みを負い、自らが深い傷を担われた。私たちは、そのような主イエス・キリストの在り方を覚えたいのです。

自責の杖

実は、私はこの聖書箇所を黙想しながら、古くから同志社の中で語り継がれてきたある出来事が、この御言葉に重なっているように示されました。皆さんは、創立者・新島襄の「自責の杖」の逸話をご存じでしょうか。1880年4月、一部の学生たちの集団無断欠席の騒ぎが、新島の出張中に起こったとして、伝えられている出来事です。原因は、2年生のクラス編成の問題から端を発したのです。新島校長が戻り、騒ぎは一応収まっても、今度は無断欠席をした学生たちの校則違反の処分が問題となりました。新島は、朝のチャペルで、右手に杖を持って講壇から、「今回の紛争は、学生や教師たちの責任ではない。全ての責任は校長である自分にあります。よって校長を罰します」と述べて、自らの左手を右手で持った杖で、それが三つに折れるまで打ち叩き続けたということです。まあ半ば、伝説ともなっているような話であり、事実関係に多少尾ひれがついて語られているとも言われますが。ただ、当時その場にいた同志社英学校の学生の一人が、後にこう書き記しています。「先生が（中略）手を打たれた時には、全校の生徒が最も深く感激したものである（中略）御自身の手を撃って自己を責められたのである」（亀山昇「親心の教育」『新島先生記念集』同志社校友会 1940年 160頁）と。そうです。人を安易に裁くのではなく、まずは自らを省みて、事にあたった新島校長。そして、どこまでも学生たちを思う彼の心が、学生たちに反省の思いと深い感動とを与えたのです。そこにこそ相手を生かす真実の言葉かけがあったのです。まさにイエス・キリストの御言葉を体現し、それを学生に示した新島襄の姿が、浮かび上がってくる話ではないでしょうか。自らを真摯に見つめながら、相手を咎めずに待つ。相手の良心に働きかけながら待つ。相手がいつか、よき方向に変わるであろうことを祈りながら。私はこれが本当の愛ではないかと思います。

自らを振り返る

こうお伝えしたいと思います。イエス・キリストの御言葉は、私たち一人ひとりに向けられている。だから私たちもそれを真摯に受け止めたい。そのために、まずは自分自身を本気で振り返りましょう。そうすることから始めれば、人に対する私たちの言葉は、思いやりの言葉となります。さらに、それは人を生かす言葉へと変えられていくと思うのです。そして、その時、そこには分裂ではなく、一致が必ず生まれるのです。

もし、私たち皆が、本当にそのように生きられるならば、人と人との繋がりは、この社会は、この世界は、もっともっと温かで、もっともっと希望に満ちたものになるはずです。如何でしょうか。このことを心に刻み、御言葉をくださった主イエス・キリストと共に歩んでいきたいと今、心から願います。お祈りします。